

「学校教育の情報化に関する懇談会」第5回、論点について 2010年6月9日

大学発教育支援コンソーシアム推進機構 副機構長 三宅なほみ(東京大学)

(1) 21世紀にふさわしい学校や学びはどのようなものか。教員に期待されるものは何か。このような学校や学びを実現する上で、学校教育の情報化はどのような役割を果たさうか。

鍵は、多様な学びをどう保障するかだと考えています。底上げもトップの引き上げも、均一化を目標として実施すると成果が上がりません。個人が「学ぶに値する対象」を見つけて学習目標を立て、それをクリアできる環境を実現することが必要です。このような学習環境の実現には双方向発受信可能な情報基盤の活用が必要であり、教員には、教員自身がそのような「多様な学びのコミュニティ」の一員として、児童生徒による学習対象の発見や見つけた対象の攻略法を支援できることを期待します。

(2) わかりやすい授業の実現や児童生徒の情報活用能力の向上等の観点から、また、子どもたちの発達段階、学校種、教科等を踏まえ、デジタル教科書・教材、情報端末・デジタル機器・LAN等には、どのような機能が求められるか。仮にこれらを導入・普及する場合、どのような課題があり、どのように解決すべきか。その際、国に求められる役割は何か。

デジタル教材等に求められる機能としても、(1)で書いた学習の多様性を保障することが第一に上げられます。第二に、学習の進み具合についての自己評価、形成的評価を可能にする機能が必要です。これらの実現に向けて、学習環境開発や教材開発と実践データの社会的な共有吟味が必須だと考えますので、双方向受発信が可能なIT基盤の導入・普及が必要です。IT環境の設営、維持管理、開発の全面にわたって、現在個別の学校や教育委員会で行われていることを国主導でサポートする体制が必要だと思います。

(3) 教職員の負担軽減、学校経営の改善等の観点から踏まえ、求められる校務支援システムはどのような機能を有するべきか。また、校務支援システムの充実を図るためには、国と地方の役割分担のなかで、国に求められる役割は何か。

教員が教育方法や学習目標、学習過程について同僚とともに吟味する時間を増やすため、校務そのものの見直しが必要ではないかと感じています。

(4) 教員のICT活用指導力向上、教員へのサポート体制の充実のために、国に求められる役割は何か。

学習の目標や学習成果が多様であることの必然性と必要性をまず私たち(研究者や教員、親を含む市民一般)が理解して、その認識を国が容認していることが基盤として必要だと感じています。

(5) その他

多くの国で画一的な教育からの脱却が図られており、「時は今」が合言葉になりつつあります。時間のかかる取り組みだけに、できるだけ早くできるところから取り掛かる必要があると思います。

以上です。ご検討、よろしくお願いいたします。